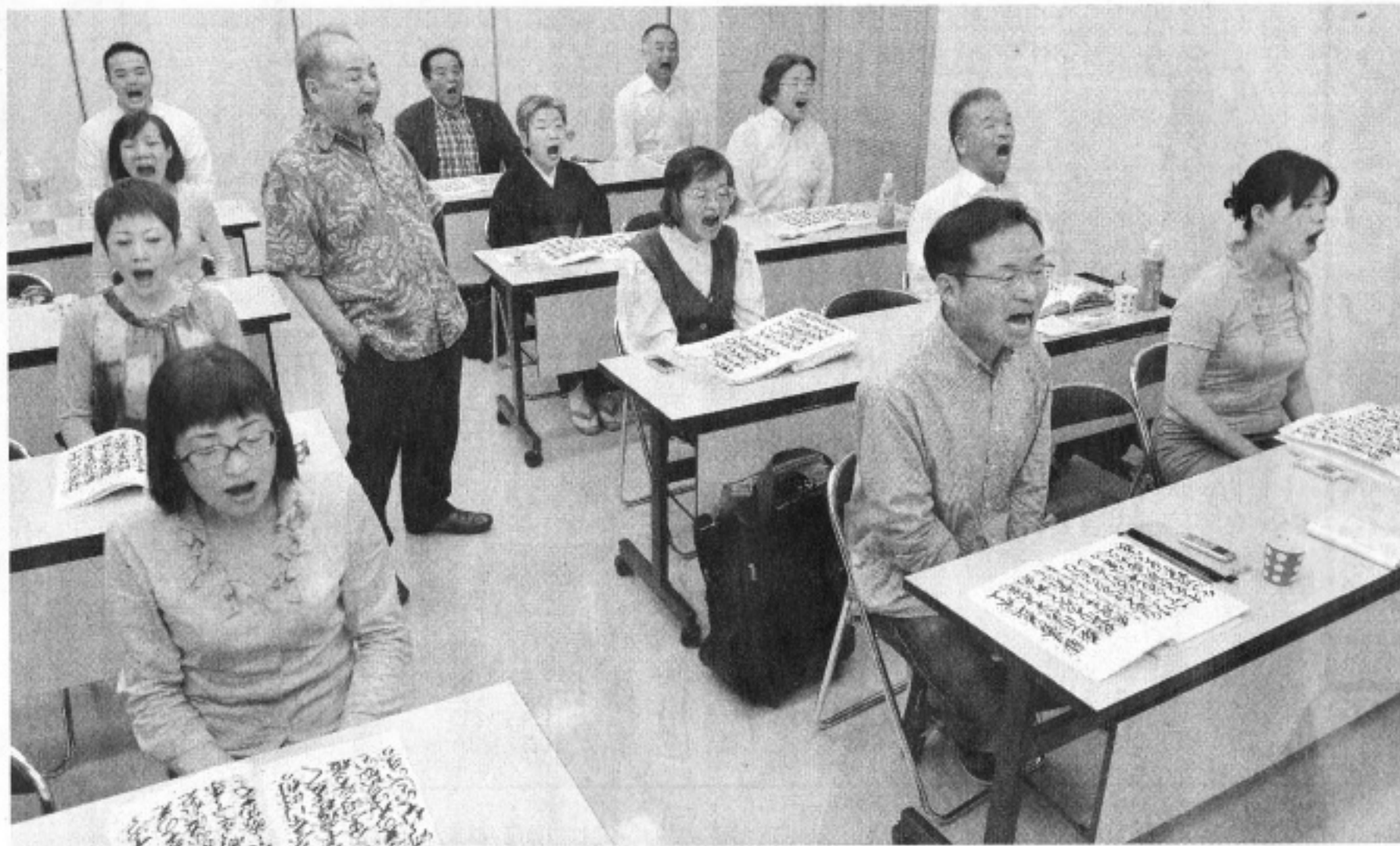


## わい、ず倶楽部

## 義太夫教室

伝統芸能の人形浄瑠璃文楽で、ナレーションと登場人物のせりふを一人で語る「太夫」に、義太夫節を学ぶ教室があります。江戸時代に始まった浄瑠璃の一種で、情感たっぷり

に華麗な節回しで語るのが特徴です。腹の底から大きな声を出し、伝統芸能を肌感じて暮らしに潤いをもたらすと、中高年を中心に幅広い世代で人気が高まっています。



「絵本太功記」の山場「尼ヶ崎の段」などに挑んでいる。年に1度の発表会では、正式な舞台衣装の肩衣かたぎぬを借りて、一人ずつ語る。9月の発表会に参加した安藤英敏さん(64)は「自宅での練習にも熱が入って、妻も興味を持つようになった。一緒に文楽に行くなど夫婦共通の趣味ができました」と喜ぶ。

英大夫さんは「義太夫は、大阪なまりが基本でなじみやすい。大きな声で語ることでストレス発散になり、物語をいっそう楽しめるようになる」と文楽ファンの広がり期待する。国立文楽劇場(大阪市)では25日まで、「仮名手本忠臣蔵」を上演している。

▲腹の底から大きな声を出す練習をする義太夫教室の受講生ら(大阪市浪速区) 〓永尾泰史撮影

文楽は、太夫、三味線、人形遣いの3者から成る。舞台正面で人形を操り、上手側に設けた小さな舞台上に太夫と三味線が座って、一つの物語を作り上げる。

文楽太夫の豊竹英大夫さん(65)は、2001年から義太夫教室を主宰している。落語家向けの発声練習が口コミで広がった。現在は大阪市内の2か所で、

主婦や退職後の男性ら20〜70歳代の男女約50人が学んでいる。

稽古は、柔軟体操から始まる。立った姿勢で両腕を思い切り前に伸ばしながら、大きく腹式呼吸する。ほぐれたところで、義太夫の有名な詞章(文章)を語る。

阿波藩のお家騒動を描いた名作「傾城阿波の鳴門」

の「父(とと)さんの名は十郎兵衛、母(かか)さんはお弓と申します」という有名な一節を繰り返している。盗まれた主君の刀を取り戻すため、大阪で盗賊の一味に加わった十郎兵衛と妻、お弓の元へ、両親を探して訪ねてきた巡礼姿の娘のセリフだ。お弓はすぐに我が子とわかるが、災いが及ぶことを恐れて名乗りが

できない、という筋書きが涙を誘う。今年4月に通い始めた大谷武子さん(70)は「最初は少し緊張したけど、大きな声を出すとすっきりして、美容にもいいみたい」と笑う。

教室には、文楽の三味線弾きが来て演奏する。太棒たぼうと呼ばれる重厚な響きを持つ三味線の音色に合わせ、明智光秀を題材にした演目

## 華麗な節回し 大声で発散